

まうあそ まよせいぞ

Vol.14

rcrc.ryukoku.ac.jp

〔発行日〕

2021年9月17日

〔編集・発行〕

龍谷大学 矯正・保護総合センター



2020-2021年の活動を振り返って

龍谷大学

矯正・保護総合センター長 浜井 浩一

矯正・保護総合センター長となって二期目を迎えました。慣例に従い2020年を振り返りつつ、この1年間のセンターの活動についてご報告させていただきます。

当センターは、矯正や更生保護に関する教育実践としての矯正・保護課程と研究としての矯正・保護研究センターを統合し、新たに社会貢献活動を付け加えて2010年に開設されました。

教育活動としての矯正・保護課程について2020年度は、新型コロナウイルスによるパンデミックの発生によって緊急事態宣言が発令されるなど前期はすべての講義がオンラインとなり、後期も一部科目はオンラインで実施することになりました。事前準備がまったく整わない中でオンライン講義であったにもかかわらず、課程講師の皆様の真摯な対応によって大きなトラブルなく講義を実施することができ、総受講者数も2,222人となりました。

また、矯正・保護課程の成果としては、2019年度に開催された「法務省政策提案ワークショップ 社会人×学生」に当センターを通して参加した法学部生が、2021年3月に開催された京都 कांग्रेस第14回国連犯罪防止刑事司法会議のワークショップにおいて、その成果を英語で発表しました。

研究活動についても、新規・大型事業として團藤文庫資料整理事業が認められ、丸善雄松堂株式会社との業務委託契約によって文庫の整理作業が進んでいます。團藤文庫プロジェクトについては、その成果がNHK等のマスコミからも注目されています。刑罰理論研究プロジェクトなどそれ以外のプロジェクトにおいても、コロナ禍でのオンライン研究会等を活発に行っています。実証研究プロジェクトでは、ISR D（国際自己申告非行調査）における日本調査の報告書を刊行するとともに、日本犯罪社会学会のオンライン大会においてテーマセッションを開催し、

その成果を報告しました。

センターでは、教育・研究に加えて社会貢献活動を中心に新たな活動にも挑戦しています。ここでは、そのいくつかを紹介したいと思います。

12月19日には、人数制限やマスクの着用など感染防止策を徹底することで、京都駅前龍谷大学響都ホール校友会館において第10回矯正・保護ネットワーク講演会を開催することができました。講演会では、「ケーキの切れない非行少年たち」をテーマに立命館大学の宮口幸治教授にご講演いただきました。講演の中で、宮口教授は、少年院での非行少年たちとの出会いによって、彼らの生きづらさの背景に、見たり、聞いたり、想像したりする認知機能の弱さがあること、認知機能を向上させることで、その生きづらさを緩和させ、更生に向かわせることができることを、ご自身が開発されたコグトレ（認知機能強化トレーニング）を紹介しながら、具体的にわかりやすく解説されました。

2020年度も、社会貢献活動の一環として、センター長が、地方自治体が法務省から受託している再犯防止推進モデル事業（鹿児島県奄美市、愛知県）等に学識経験者として参加し、奄美市においては、「再犯防止推進委員会」の委員長として再犯防止推進計画（2021年3月公表）のとりまとめを行いました。また、奈良市では「更生支援に関する懇談会」に座長として参加し、更生支援に係る条例案（2021年3月23日可決）のとりまとめを行うなど、研究成果の社会実装という観点から地方自治体における再犯防止の取り組みにも積極的に協力しました。

矯正・保護総合センターは、これまでの10年の経験を踏まえ、2021年以降は、教育、研究、社会貢献のさらなる充実に向けて努めていきます。引き続きよろしくお願いたします。

センター主催 第10回矯正・保護ネットワーク講演会

2020年12月19日に開催しました第10回矯正・保護ネットワーク講演会では、立命館大学教授の宮口幸治氏（一般社団法人日本COG-TR学会代表理事）をお迎えし、「ケーキの切れない非行少年たち」と題して、ご講演をいただきました。今回は、新型コロナウイルス感染予防の観点から定員を150名に限定させていただき開催しました。当日は多数の方にご参加いただきました。お陰様で講演会は盛況のうちに無事終了することができました。

「ケーキの切れない非行少年たち」

講演者 ^{みやぐち} 宮口 ^{こうじ} 幸治 氏 立命館大学教授／
一般社団法人日本COG-TR学会代表理事

開催日時／2020年12月19日(土) 13時30分～15時00分

開催場所／龍谷大学 響都ホール 校友会館

開催趣旨

龍谷大学は、100年以上に及ぶ浄土真宗本願寺派の宗教教誨を基盤としながら、1977年に刑事政策に特化した教育プログラムとして、矯正課程（現在の矯正・保護課程）を設置しました。それ以来、刑務官や法務教官、保護観察官などの専門職のほか、保護司や篤志面接委員、BBSなどのボランティアの養成に努めて参りました。

また、2001年には、矯正・保護についての学術研究を推進する矯正・保護研究センターを設置しました。この研究センターは、2002年度からは、文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業（AFC）に採択され、8年間にわたり研究活動を行ってきました。

2010年には、矯正・保護総合センターを開設し、矯正・保護課程の教育活動と研究センターの研究活動との有機的な統合をはかることとしました。さらに、矯正・保護の分野における社会貢献活動も、事業の柱として明確に加えることとしました。その一環として、2011年度から矯正・保護ネットワーク講演会を開催させていただいております。この講演会は、矯正・保護の実務家や関係する行政機関、民間団体、企業家、専門職の方、地域の方など、矯正・保護の問題に関心を寄せる多様な人々に対し、それぞれの思索と相互理解を深めるため、議論・研修の場として提供させていただいております。

今回は、60万部（講演会開催当時）を突破した話題の新書「ケーキの切れない非行少年たち」の著者である立命館大学の宮口幸治氏をお招きしご講演いただきます。

この講演会がお集りいただいた皆さんに実り多いものとなりますよう、心から願っております。

プログラム

- 挨拶・趣旨説明・講演者紹介
浜井 浩一（龍谷大学矯正・保護総合センター長／同大学法学部教授）
- 講演
講演者 宮口 幸治氏（立命館大学教授／一般社団法人日本COG-TR学会代表理事）

後援

京都府、京都市、浄土真宗本願寺派、京都保護観察所、京都府保護司会連合会、京都府更生保護女性連盟、更生保護法人京都府更生保護協会、京都BBS連盟

はじめに

皆さんこんにちは。ただ今ご紹介いただきました、立命館大学の宮口幸治と申します。本日はこのような貴重な場にお招きいただき、誠にありがとうございます。先ほどの浜井先生のお話が立派でしたので、これで何か講演会が終わったような感じがありましたね。私も帰ろうかなと思ったぐらいの立派なお話でした。

今、私は大学で勤務していますが、もともとは児童精神科医で、大学の前は医療少年院で勤務していました。今も非常勤で勤めていますので、もう10年ぐらいになります。

その前は大阪府立の精神科の病院で勤務しておりました。どうしてその精神科の病院を辞めて少年院に移ったのか。ここが一番大事なところなんですけれども、実は、病院というところは、保護者などが、その子の問題に気づいて連れてくる場所です。支援者がやはり連れてこないで成り立たない場所なんです。私が勤めていた医療少年院というのは、そもそも病院とは全然縁のない子たちばかりだったんですよ。要は気づかれない。病院に通っていて、障害などが事前に見つかっているといった子たち自身がすごく珍しくて、ほとんどが気づかれないような子たちだったんですね。本当に支援が必要な子たちというのは、病院になんか来ないということが分かりまして、それならば病院でずっと診察をしても、本当に支援が必要な子には届かないと思い、病院を辞めて少年院の方に移りました。

そしたら、病院でこれが問題だと思っていたことと全然違うことが、(少年院では) 問題になっていました。そういうことを今日、前半で少しお話しさせていただきまして、じゃあその子たちをどうするか。再非行させないためにどうするかということなんですね。そこで具体的に開発され、編み出されたのが認知機能強化トレーニング(以下、「コグトレ」というものなんですけれど、今はもう学校教育の方ではすごく広まっています、むしろ矯正の方であまり知られていないかもしれないんですけど、学校教育、日本の学校では、ほぼ使われるような感じになってきていますね。今日はそういった具体的などところをご紹介していきたいと思えます。



「反省以前」の子どもたち「凶暴で手に負えない少年」の事実～世の中のすべてがゆがんで見えている?～

これは、書籍にもありましたけれど、Reyの図と申しまして、これを写す課題なんですね。これはもともと1940年代ぐらいの古い検査なんですけれど、もともと認知症の方とか、交通外傷とか、頭部にけがをされて、その認知機能を測る検査として使われていました。今は子どもの視覚認知を測る方法としてよく使われています。

私は少年院に勤務して、最初の診察をするときに、その中で一番手のつけられない子の診察を頼まれました。もう暴力がひどくて、なんとかしてほしいというので、まあ診察室でおとなしくしていただくんですけども。

その子にこの絵(Reyの図)を描かせたんですね。そのときに描いた絵が次の絵(少年が描いたものを模写した絵)だったんです。これを見たときに、私の中で今まで考えていた概念というのがガラガラと崩れて、「これはいったい何だ」というふう思ったんですね。

私は雑誌の取材なんかよく受けるんですけど、この絵(少年が描いたものを模写した絵)を記者の方に見せたら、「どう思いますか」と聞いて、「ああ、写すのが苦手なんですね」とってさらっと答えられるんですけど、そんな単純な問題じゃないですよ。これ(見本の絵)が、写してこのように(少年が描いたものを模写した絵のように)見えちゃう。これ(見本の絵)がこういうふう(模写した絵)に見えているということは、要は世の中のことが全てゆがんで見えてしまっている可能性があるんじゃないかな。見る力がこれだけ弱かったら、聞く力も当然弱いでしょうから、こちらが伝えたいことが伝わっていないんじゃないかな。ひょっとして、これが非行の原因になっているんじゃないかなというふう(私は)直感したんですね。

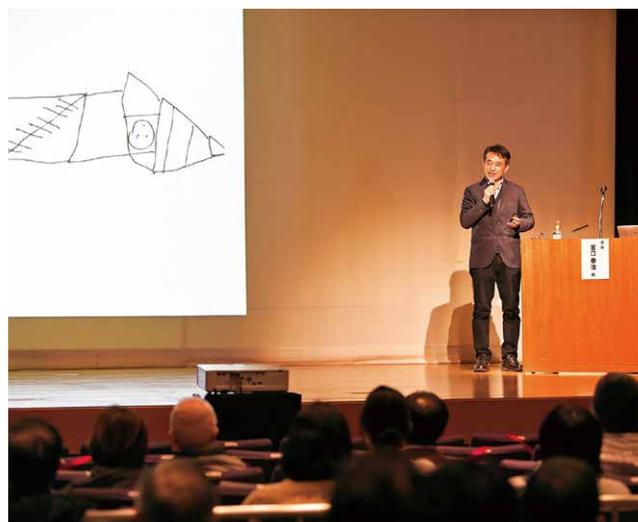
彼らの非行とか犯罪を治すには、これをなんとかしなきゃいけないなとすごく思ったのがきっかけです。これが最初で、ここでコグトレというのが始まっていくんですけども。

次に「思い出して描いてごらん」といって描いた絵(実際に

少年が思い出して描いた絵を提示する)は、このようにもっとひどくなります。だから本当に早く介入してあげないといけないと思うんです。

これは、立体図の模写(見本の立体図と少年が実際に描いた立体図をいくつか提示)なんですけれど、だいたい7歳から9歳ぐらいの課題です。これが小学校低学年だったら、描けない子がいてもいいんですけども、これを描いているのが中学・高校生ぐらいの子たちで、要は少年院の非行少年たちなんですね。凶悪犯罪をやった。中には殺人の子もいますけれど、そういう子たちがこれを描いていてですね、こんなふうに(実際に少年が描いた絵)しか描けないんですね。

こういうことを見て、「非行の反省をしなさい」とか、「被害者の気持ちを考えなさい」と言っても、どれだけ彼らの心に響くかですよ。そのときは「はい」と分かって、すぐに右か左に抜けちゃうんじゃないかな。まず非行の反省や、被害者の気



持ちを考えさせるのはもちろん大事なんですけれど、それ以前にこれ（見本の図）をしっかり描ける力を身に付けさせることが先

じゃないかなと思ったんですね。そういうところから（コグトレは）スタートしています。

気づかれない子どもたち

認知というのは、「見る」「聞く」「触れる」「味わう」「匂う」といった五感を通して情報を仕入れて、その情報を基に計画を立てて、結果を出していきます。通常ですね、認知がゆがんでいる、要は考え方がゆがんでいる、感じ方がゆがんでいるというときは、いまよく広く使われている認知行動療法で、ここ（「認知」のところ）にアプローチしてもいいですけど。

ところが、もし（認知した）情報自体がゆがんでいた場合、ここ（「認知」のところ）だけ支援して効果があるのか。実際、図（認知機能の説明図）のような単純な構図じゃないんですけども、すでにここ（「認知」）だけゆがんじやって、そこだけを支援していいのかわ、効果があるのかというところなんですね。やはりここから全部を、全体的に支援していかないといけないというところですよ。

これは知的障害と境界知能というところなんですけれど、これが今日一番お伝えしたいところなんですけれど。現在、知的障害の定義といたら、IQが70よりも低くて、社会性に障害があれば診断がつきます。次に境界知能というのは、現在、IQが70から85で、知的障害までは行かないけれど、ちょっと知的にしんどいなというところの子たちですね。IQ70から85の境界知能といわれるところには、だいたい14%、クラスに5人ぐらいいます。

ところがですね、ここの境界知能といわれるところ（IQ70から85）は、WHO（世界保健機関）の国際疾病分類、ICD-8という、1965年から10年間、実は境界性精神遅滞というふうに言われていた時代があるんです。要はこの時代でしたら、ここ

（IQ85）まで知的障害だったんです。どうしてこれがここまで下げられたかという、あまりにも人口が多すぎる。14%。日本の人口でいうと1,700万人。これがみんな知的障害になったら大変なことになります。いろいろな問題もあって、ここに下げられたという経緯があります。

ということは、定義が下げられただけで、この人たちは宙に浮いちゃっているんですよ。いまだどうなっているか。学校ではまずほとんど気付かれないですね。刑務所なんか見たら、やはり4割か、半分近くはこの人たちなんですね。

この人たち、まだ学校にいる間は先生方がいろいろ注意して見ていただいているかもしれないんですけど、学校を出て社会に出たら、完全にもう忘れられてしまうんですね。仕事が続かない、対人関係がうまくいかない、職を転々とする。それで最悪、刑務所に行ったりというところですよ。

誤解ないようにしていただきたいのは、この人たちが刑務所に行くんじゃないで、刑務所に行っている人たちを調べたら、ここの人たち（IQ85以下の人）が半分近くいたということなんですね。発達障害がそんなに支援が必要ではないということでは全くないんですけど、いまは発達障害がかなり注目されて、境界知能のことはほとんど注目されていないんですね。

実際の支援がどうなっているかといえますと、（グラフを提示しながら説明）これは縦軸がIQ、横軸が発達障害の傾向とします。知的障害（IQ70以下）であれば、これは療育手帳とか、そういう支援が受けられます。発達障害の傾向が強かったら（IQに関係なく）、発達障害という診断がついて、発達障害の支援が受けられる。じゃあここの境界知能（IQ70から85）はどうかといたら、全く支援がないんですね。学校でこの支援が全くない。勉強にもついていけない、対人関係もうまくいかない、仕事も続かないという方がいっぱいいるんですね。

どうしていい年した大人がこんなことするんだって人たちの中に、やはりこの人たち（境界知能といわれる人たち）がかなりいるんじゃないかなという感じがするんですね。ですので、ここ（境界知能といわれる人たち）の支援というのが、まさにコグトレの支援なんですね。ここ（境界知能といわれる人たち）にターゲットを当てています。こういう人たち、子どもたちの特徴を5点セット+1というかたちでまとめさせていただいています。



困っている子どもに共通する特徴 困っている子どもの特徴5点セット+1

困っている子どもの特徴「5点セット+1」。この特徴は、簡単に申し上げますと、見たり、聞いたり、想像する力（認知機能）が弱い。それから感情統制が弱い。これはすぐにキレてしまう。融通が利かない。頭が固いということですね。それから自分

のことがよく分かっていない。それから対人スキルが乏しい。プラス、不器用というところですよ。一つずつ簡単に申し上げていきますけれども。

【認知機能の弱さ】見たり聞いたり想像する力が弱い

認知機能が弱い。要は見たり、聞いたり、想像する力が弱い。こちらが伝えたいことが伝わらない。したがって、教育の土台ができていないということなんですよ。

これはですね、小さいMという字が集まって、Aという字を形づ

くって。これを思い出して描く課題なんですけれど、ウィリアムズ症候群とダウン症候群、どちらも軽度知的障害を持っている障害なんですけれども、こんなに見え方が違うんですよ。

ウィリアムズ症候群の子は小さいMは分かっているけれどAが

分からないし、ダウン症の子は、Aは分かるけれど小さいMが分からない。ですので、われわれが「こうだ」と見せていても、全然違うように見えてしまっている可能性があるということ。これはすごく、本当に気を付けないといけないところなんです。

先ほど見せた立体図も、(少年が実際模写した立体図を見ながら) こういうところをこういうふうに描いている子がいたら、もう

どこから支援していかないといけないかというところなんです。

(認知機能の説明図を再度提示) 先ほどのところですけれども、認知のところからすでにゆがんでいたとき。もうここ(「見る」「聞く」)の情報からゆがんでいるから、本人たちがいくら頑張って努力しても、違う方に結果が出てしまうということですね。ですので、ここが大事というところなんです。

【感情統制の弱さ】感情を統制できないと認知機能も働かない

次に感情統制の弱さ。これはすぐにキレちゃう、よくキレしてしまう子がいます。感情が課題の子がいっぱいいますけれども、これは「きもちの日記」と申しまして、あるちょっと課題のある子にいろいろ書かせたんですね。やはり表現が苦手なんです。こっちでいろいろ自分の気持ちを表現して、いろいろ相談するのが苦手で、いろいろ聞いても、「何もないです」「ないです」しか言わなくて。

それで「きもちの日記」を書かしてみたら、書けるかなと思って書かせてみても、やはり(最初の7日間は)「ありません」「ありません」「ありません」って。もう無理かなと思いましたが、10日間は続けようかなと思って、10日間続けました。そうしたら10日目からびっしり書き始めてきました。すごく書いていますよ。

「よかったこと」(の欄)は「ありません」が多いんですけど、「わるかったこと」(の欄)を見てみますと、「僕はこんなに頑張っているのに、どうして先生は僕ばかり叱るんだ。」「どうして僕ばっ

かり」という不平不満をいっぱい書いていますね。これだけストレスをためていて、でも表現できない。じゃあどうなるかと思ったら、どこかで発散しなきゃいけないですよ。

じゃあこの子はどうしていたかという、毎日図書館に通って、それで小さい女の子を見つけてはトイレに引きずり込んで、ずっと強制わいせつをしていたんですね。そういう感じでストレス発散。

だからこれはなんとかしなきゃいけないですね。認知だけの問題じゃないです。感情もなんとかしなきゃいけない。もう包括的に支援していかないといけないというところなんです。

(認知機能の説明図を提示) 先ほどの認知のところですけど、「怒り」というのがやはり一番大きいですね。われわれもかっとなったら、ちょっと冷静な判断ができなくなりますよね。見たり、聞いたり、触られただけですぐに手が出てしまったり。この怒りをなんとかしなきゃいけないというところなんです。

【融通の利かなさ】頭が固いとどうなるのか?~ケーキを切れない子どもたち~

そして融通が利かない。これがですね、頭が固い。これが彼らのかなりの生きにくさにつながっていると思います。われわれは困ったことがあったら、Aの方法、Bの方法、Cの方法、いくつか選択肢が出てくると思うんですけど、頭が固いとだいたい1個しか出てこないんですよ。よく出て2個までですね。ですので、これがあたらこれをするというふうには、本当に選択肢の幅が狭くて、前に失敗していてもまた同じ方法をやって失敗してしまうということをずっと繰り返しちゃうんですね。すごい頭が固いんですね。

こういう子に、「5個のリンゴを3人で平等に分けるにはどうしますか」という課題を出します。そうしたらですね。コロナでなかったらフロアの皆さんに答えていただくんですけどね。

この課題は普通に考えますと、まず5個あるから1個ずつ分けようかというふうに分けて、あとの2個をどうするかということになることが多いですね。ちょっと細かくなると、1個を3等分して15個に分けて、一人5個ずつ。そういう切り方とか、いろいろな切り方がフロアでご発言されるんですけど。

じゃあこれを融通の利かない子はどう答えるかと思ったら、「これは5÷3ですね」とって、計算を始めちゃうんですよ。それで1.666つ



で割り切れないから、「分けられません」って言うんですよ。「いや、そんな計算問題じゃないよ」って言うところが、融通が利かないんですね。ですので、これでは生きにくいだろうなと思いました。

それでそういう子たちに、「この丸いケーキを3等分してごらん」と言って切らせたら。（実際に子どもたちが描いた3等分の絵を提示し）これを見たときはやはりショックでしたね。目の前の子。もう本当に凶悪犯罪をやっている子たちが、もう必死に悩んで、悩んで、一生懸命描き切って、この絵なんですよ。ずっと切れない

んですね。もう本当に固まっている。それで一生懸命悩んだ挙げ句が、これらの絵なんですよ。それで「5等分してごらん」って言ったら、（実際に子どもたちが描いた5等分の絵を提示し）もうこんな切り方をしちゃうんですね。これは大変なことなんだということで、少し宣伝になって申し訳ありませんが、自分の著書「ケーキが切れない非行少年たち」が、いま台湾や韓国で翻訳されています。まだあまり話題にはなっていないみたいなんですけれども、そういうところの弱さがあります。

【不適切な自己評価】自分のことを知らないとどうなるのか？

それから「不適切な自己評価（自己認知）」。これは自分のことはいいやつだと思っちゃっているんですね。自分に問題はないと思っている。これは何が困るかという、自分に問題がないと思ったら、自分を直そうという動機付けが出てこないんですね。だから自分のことは棚に上げて、人の批判ばかりしちゃうような子ですね。そういう特徴がありますね。

そういう子たちに自画像なんか描かせたら。これは通常（一般）の軽度知的障害を持った子の自画像ですけれども、こんなに見え

方が違うんですよ。（次の絵を提示し）これは（軽度知的障害の）非行少年が描いた自画像です。こんなに（自画像が）ゆがんじやっている。要は自分の姿をはっきりと鏡で見たことがないんじゃないかなというぐらいの、そういうゆがみなんですよ。こういった子もしっかり、自分はどういう人間かというのをしっかりと知ってもらう必要があります。

今日プログラムはそこまでご紹介できないですけど、コグトレプログラムはそこまで全部含めて作ってあります。

【対人スキルの乏しさ】対人スキルが弱いとどうなるか？

最後の「対人スキルの乏しさ」ですが、これはあらためてご紹介するまでもなく、対人スキルの弱い人が困るのは、ドライに言いますと、いま世の中、サービス業が7割を占めていますので、このスキルが乏しかったら、サービス業の仕事に就けないんですね。

あと現実的な話をすれば、対人スキルが乏しい人は、いじめに遭っても助けを求めたりすることができないし、嫌なことが断れないといった状況になり、どんどん、どんどん悪循環になっていきます。

【+1身体的不器用さ】身体が不器用だとどうなるか？

そして、プラスアルファで「不器用」という。こういう発達上の問題を持っている子たちは結構な割合で、身体が不器用なんですよ。これは何が困るかと言いますと、やはり勉強が苦手なので肉体労働に就くことが多いんですけど、そこで身体が不器用だったら、もう生きていけないんですよ。

だいたい建設現場で働く子たちが多かったですけど、やはり身体の使い方とか、道具の使い方が悪くて、親方から怒鳴られて、もうそれですぐに嫌になって辞めちゃう。そうしたらまた再犯をやっちゃうんですね。

ですので、この身体を器用にしてあげて、それで社会に出してあげるといのは、これも一つの少年院の役割として、そこでも、コグトレプログラムも身体への支援ということで、包括的に支援していくという方向です。

ここの「包括的支援のために」というところで、いま申し上げた「社会面への支援」ですね。それから「学習面への支援」、「身体面への支援」。この三つが絶対に彼らに必要なだというふうに、少年院に勤務して思っております。

コグトレとは～子どもへの社会面、学習面、身体面の三支援～

認知機能に着目した新しい治療教育

ここからはコグトレを具体的に紹介していきたいと思います。コグトレは「社会面」「学習面」「身体面」という3方向からの支援になっています。今日はこの、特に「認知面」のところを中心にお伝えしていきたいと思います。

ここで一つ症例を、少しご紹介したいと思うんですけど、私は某市で教育相談をずっとやっていまして、そのケースを少しアレンジし、プライバシーが分からないようにしています。

勉強が苦手な子が、保護者に連れられて相談に来るんですね。そこでどこにつまずきがあるのかっていうのをフィードバックして返してあげるといことをずっとしているんですけど、小学校の通常学級の5年生の子の例です。

お母さんによりますと、「問題を解くのに人の2倍以上、時間がかかる。学習についていけないのか？集中力がないのか？原因を

知りたい」ということでした。お母さんからしたら、それはいろいろ心配でしょ。

それで学校の先生からの情報もあるんですね。これを聞いたら、「学習にはついてこれる。大テストで90点取れる。しかし授業中の集中力が途切れやすく、私語が目立つ」。勉強は問題ないですよといった感じでしたが、「集中力はないですよ」と担任は言っている。

これはどっちが本当なんだというところで、私も少し困りまして。それでいろいろ調べていったんですけど、IQテスト（WISC-IV）をしたら、この子のIQは80です。境界知能なんですよ。

これは簡単に申し上げますと、（IQテストの結果を提示し）この一番左の欄にあるのがIQ（総合IQ）なんですよ。（IQテストの項目は）「聞く力」「見る力」「記憶」「スピード」といった内容なんですけれども、「聞く力が」90。（各項目とも）平均は

100なんですね。「聞く力」が90ぐらい、「見る力」が74ぐらい、「記憶」が88ぐらいで、「スピード」が86ってということで、かなりしんどいですね。

そしてトータルで80ということで、境界知能になるんですね。でも学校の先生はこれに気付いていないですね。「学習についてこられていますよ」「テストで点は取れていますよ」と。ここで大きな見逃しがあるんですね。

なぜ学校の先生はこれが分からないかというと、実は私も（大学で）教職（課程）の授業をずっと教えていますけれど、実は「知的障害」に関する授業は、先生になる上で取る必要がないんですね。つまり発達障害とか概念的なことは学びますけれども、知的障害の専門的なことは学ばなくても先生になれちゃうんですよ。

だからいま現役の先生方の中には、知的障害のことを知らない先生がたくさんいます。「知的障害の定義は？」と言っても、これに答えられない先生方がたくさんいるんですよ。だから知的障害のことはほとんど見逃す。軽度知的障害でも、それなりに学校生活を送っていたら見逃されるケースが結構多いんです。境界知能に関しては全く気付かれていない。

これが本当に日本の教育で大きな問題になっていて、こういう子どもたちが社会に出ていく上で、いろいろな挫折を味わって、それ



で最悪、非行・犯罪の方に行ってしまう一つのきっかけになっているんじゃないかなと、私はすごく感じています。

早期の予防のためには、いかに早い時期にこの子どもたちを見つけてあげて、支援してあげるかというところが、本当に日本の将来、これからを変えていくほどの大きなことだと思っています。

ではどうすれば？～1日5分で日本を変える～

トレーニングの事例紹介①

〈課題〉写す：「点つなぎ」

実際に境界知能、じゃあ具体的にどういふところが弱いのかという。これはコグトレにあります「(写す)点つなぎ」という課題なんですけど、小学校5年。これを、葉っぱの絵を下に写すんですけど、これが写せないレベルなんですね。これをだいたいのぐらい写せるかといったら、だいたい小学校2年生で写せます。1年生の子でも写せる子が結構出てきますけれど、2年生の子で8割方は写せません。

斜めの線とかは少し写しにくいんですけど、5年生でこれ(葉っぱの絵)を写せないっていうのは、漢字がまず覚えられない。見てもまず書けないと思います。でも学校で気付かれていないんですよ。ずっと5年生までね、それまで1年生から4年生までの先生、誰も気付いてこなかった。でもこれ(上の葉っぱの絵)が描き写せないですね。

〈課題〉見つける：「同じ絵はどれ？」

次の絵ですが、点々の中から正三角形を見つけるという課題なんですけれど、ここ(丸印)の2箇所の三角形は全然形が違いますね。このように点々の中から正三角形を見つけるということができない。これは形の恒常性という力を見ていまして。

黒板を写すときに、黒板の三角形とノートの三角形、大きさも角度も違うのにどうして写せるかというと、三角形ということが分かるから写せるんですね。これが分からなかったら黒板は写せないんですよ。ですので、この子は黒板を写せないですね。そういうところでつまづきがあって、でもこれは学校でも気付かれていない。

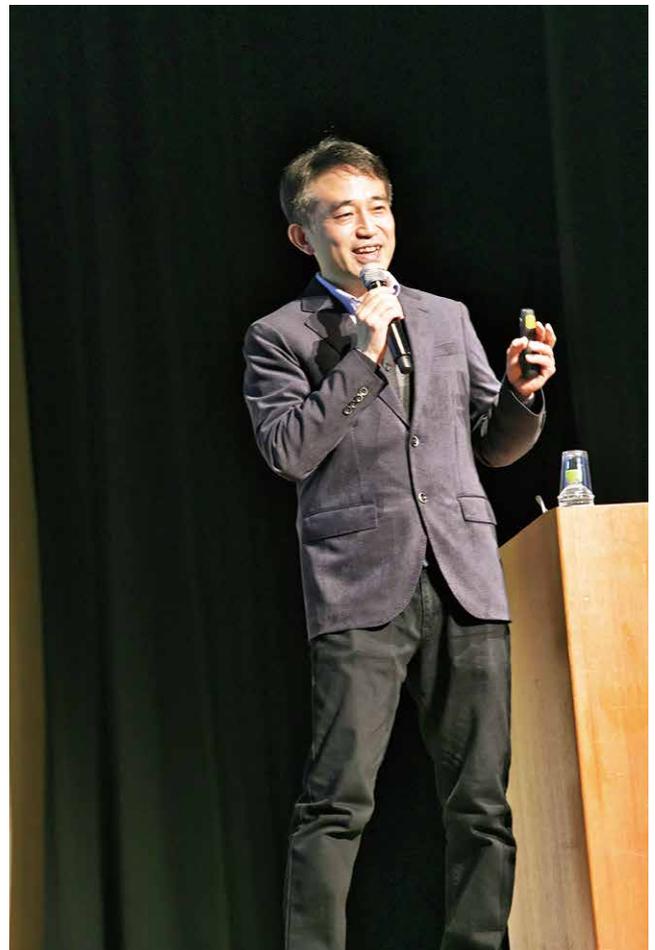
〈課題〉数える：「記号さがし」

これは「記号さがし」という課題です。(いろいろな記号の中から)正三角形を数えていくんですけど、この青い(矢印で示した正三角形の)ところが、見落としがあるんですね。50個ぐらいの数。これが数えられない。5年生で50個ぐらいの数が数えられない。実はですね、結構いるんです。普通(正常)のクラスで4割ぐらいの子が50個ぐらいの数を数えられないということがこの

課題の回答をみて、よく分かりました。

いま、いろいろな学校で協力していただいて、もう万単位で(回答を)集めているんですけど、4割ぐらいの子が50個ぐらいの数が数えられないんですね。これも大きな問題だと思いました。

この子どもね、これだけ記号の見落とし(6箇所)がありました。これは勉強についていけなくなると思いますね。Reyの図を写し



でもこんな絵（少年が模写したReyの図）になるんですね。こんな感じです。でも学校で気付かれていない。もちろんケーキも切れないです。（少年が描いたケーキを切った図を提示し）こんな感じでね、このように変なふうに切っちゃうし。立体図もこんな図（少年が立体を模写した図）になりますね。5年生でこれですよ。

これはハチの巣の絵なんですけれど、これを写すとこんな絵（少年が描いた絵を指す）になるんですね。でも学校では全然気付かれていないというところなんですね。こういうところが本当に大きな問題だなと最近特に思います。

「学習の土台」となる認知機能は大事

学力というのは、国語・算数・理科・社会・英語、いろいろあります。その下の土台として認知機能があります。認知機能は記憶、言語理解、注意、知覚、推論・判断の5つからなっていて、それらが「学習の土台」になっているんですね。

簡単に申し上げますと、認知機能と言われてピンと来ないかもしれないんですけど、簡単な問題をお出ししますので、皆さん頭の中でちょっと考えてみてください。それでは行きますね。

A君はあめを10個持っていました。6個あげました。いまA君はあめを何個持っているでしょうか。これについて、会場のみなさまに挙手のご協力をいただけたらありがたいのですが。これで多いのが16個という方なんです、16個という方、おられますか。（会場の方に挙手してもらう）、それじゃあ、4個と思う方。（会場で手を挙げた人を確認）あぁ、どうもありがとうございます、じゃあ、そうじゃなくて10個と思う人はおられますか。本当ですか。絶対おられると思うんですけどもね、10個だよという方が、多いのが4個ですね。

これはですね、「いま、注意して聞いてくださいね」と言ったところで、注意力が要ります。もし違うことをぼろっと考えていて、違う世界におられたら、（この話は）もう（耳に）入っていないですね。それで言葉を理解しなきゃいけないので、言語理解。それから耳から入ってくる情報なので、知覚です。10個あって、6個あげるっていう、記憶が要ります。それで、ここの最後の判断、推論・判断ですけど、10個持っていて6個あげたというのは、これは大人がA君に6個あげたのか、A君が他の友達に6個あげたのか。これね、4個か16個、どちらも考えられるんですよ。中には、ちょっとですけど、変わった考えをされる方がいまして、上にあげたっていう方もおられて。そのときは、確かに10個なんですね。だから3通り考えられるんですよ。それは推論・判断ですね。

だからいまの簡単な問題でも、これを全部使っているんですよ。国語・算数・理科・社会・英語、こんなに簡単な問題じゃないでしょ。これはものすごい複雑です。これが1個でもできなかつたら、絶対に勉強ができない。ついていけない。ということで、認知機能



がいかに大事か。これは対人関係でももちろん大事ですよ。

ここのどこかにつまずきがある。だから勉強についていけない。それで勉強についていけなくなったら、どうしても自信をなくして、悪い方向に行ってしまうという。だから早いうちにというところで、認知機能がいかに大事かというところなんですね。

認知機能強化というところで、コグトレの構成は、（5つの認知機能）それぞれに対する、覚える・数える・写す・見つける・想像するという、トレーニングからなっています。

もうちょっと、これを分かりやすく言いますと。体操に例えますと、目標はインターハイに出場。体操競技でインターハイに出場するとして。そうしたら、鉄棒・床・つり輪・跳馬など、それぞれの練習をしないとダメですね。でもその下には実は基礎体力が要ります。これは鉄棒をするとか、床をするにしても、筋力、持久力、瞬発力、集中力、柔軟性など、いっぱい要りますよね、基礎体力が。

これを勉強に当てはめると、インターハイに出るのは高校に入学すること。各競技はそれぞれの教科なんですね。この下にあるのが、ここが認知機能ということで、まさに基礎体力なんですよ。

学校で教えてくれるのはここ、教科学習のところなんですよ。テクニク的なところは学校で教えますけれども、ここ（基礎体力、認知機能のところ）は家庭で身に付けてくださいといった状態なんですね。ここができない子（基礎体力、認知機能が身に付いていない子）といったら、全くついていけない。基礎体力がない子は本当に教科学習のところができないというのが、よくお分かりになると思います。ここ（基礎体力、認知機能のところ）を支援していくというのがコグトレです。

誤解ないようにしていただきたいのが、コグトレ（認知機能強化トレーニング）をやればべつに鉄棒（教科学習）ができるようになるわけじゃない。あくまでも基礎体力がアップするということですね。ここ（教科学習のところ）は学校の先生方の役割ですので、その下のところ（基礎体力、認知機能のところ）をアップするというのが（コグトレの）目的です。



子どもの心を傷つけないトレーニング～手軽にできるコグトレ～

コグトレの特徴としましては、認知機能の全ての範囲を体系的に網羅している（みる力、きく力、記憶力、注意力、想像力）というのと。それから、コグトレは、点つなぎやパズルの課題など、ゲーム感覚でできますので、子どもの心を傷つけないでトレーニングすることができるというところですね。テストの点が悪かったら、嫌になって、恥ずかしくて、もうやりたくなくなったりしますよね。そういうものじゃなくて、知らない間に身に付いている。

それから安くて、誰でも、どこでも、気軽に、何度でもできるというところで、いまテキストがありますけれども、その裏にCD-ROMが付いているんですね。800枚のワークシートが入っていて、これはコピー自由です。それがたった2,000円なんですよ。各学校に1冊あれば、もう自由に使っていただいて。もうコピーガードなんか付けていないので、自由にコピーしていただいて結構です。

です。各施設に1冊、2,000円。これだけでできるんですね。ですので、ここはすごく大事なところで、お金をかけないでいかにやるかというところ。どこも予算がないので、何度でも使えるというところ。ここが大きな特徴かなと思います。

〈課題〉覚える：「2つの図形を見て」

ワークシートの例を少しご紹介したいと思いますけれど、ここに「覚える」という課題があります。2つの図形を見て、覚えるんですね。それで何が合ったのかを描いてもらうという課題なんですけれど。

2つの図形をぱっと見て、どうやって覚えたらいいのかなというところで迷いますが、左の図はホームベースで、下の方が右を向いている。右の図は台形が重なって、中は反対を向いているというふうに、言葉に直して覚えたら覚えやすいですね。

ここに大きな誤解があるんですけど、知的障害の子たちとか勉強が苦手な子というのは、記憶力が弱いというふうに思っておられませんか。だから勉強ができない。これは大きな間違いです。実は、見る記憶力というのは、健全な子も知的障害の子も実は同じなんです。何が違うかと思ったら、工夫して覚えるという、そこが苦手なんです。

ですので、われわれも何かを覚えなければいけないとき、語呂合わせとか使いますよね。こうした工夫とかをしますね。その語呂合わせとかをする工夫ができないから覚えられない。ですので、彼らへの支援としては、いかに工夫して覚えてもらうか。そこを教えるのが一つの支援なんです。 (コグトレは) そういうと



ころのトレーニングだったりします。

次の図ですが、6つのいろいろな図形があります。単一、分離、接点、共有、複雑、立体といったいろいろ複雑で、レベルもだんだん難しくなる図があります。一番難しいのが立体図なんですけれど、こういうのもどうやって覚えていくかというところなんですけれど。

あと『『覚える』数字はどこ?』。4×4のマスの中にある1から5までの数字を、ぱっと見せて、それぞれの数字がどこにあったのか。これは、視空間、ワーキングメモリー。黒板を写したりするときに必要な力。こういうものを鍛えていきます。

〈課題〉覚える：「○はどこ?」

それから『『覚える』○はどこ?』。4×4のマスの中に赤い丸が2個。合計3枚出てきます。出てきた順番に、赤い丸が(4×4のマスの中の)どこかというのを書くんだけれども。これが1枚目。せっかくですので、ちょっと覚えてみられるといいかなと思いますけれど。2枚目、そして3枚目。それでどこに赤い丸があったのかなということです。

1個だけ見ていて、どれがどこというんじゃないで、覚えながら次を覚えるというところが特徴です。1枚目→2枚目→3枚目の赤い丸の位置を見せると、「あっ」と思われるんですね。本来でしたら、皆さんに紙をお渡しして、先ほど見せた3枚の赤丸の位置を描いてもらうんですけど。

ぱっと(会場を)見た感じ、今日は年齢層が高いですね、これをやれば、かなり皆さん落ち込まれるかもしれないですけど、逆にできたらすごい自信を持たれていいと思いますよ。

〈課題〉覚える：「最初とボン」

今度は聞く力が弱い子にどうするかという、『『覚える』最初とボン』という課題です。この課題は、二つ、もしくは三つの文章を読んで、最初の単語だけ覚えてもらうんですね。これだけだったら簡単なので、動物の名前が出たら手をたたくという、そういう課題です。上だったら、「冬の間、寒かったので……」と言っている間に「冬」という単語をしっかりと覚えて、それで動物が出たら手をたたくという、そういう課題なんです。

これもせっかくですので、少しこれをご体験していただければと思うんですけども。頭の中で少し覚えてみてください。それで、もしよろしかったら、動物の名前が出たら手をたたいてみてください。

最初の単語ね。いまから三つの文章を読みますので、最初の単語だけを覚えてみてください。それから動物の名前が出たら手をたたいてください。行きますね。一つ目、いきますね。

『『あらあら、つえがありません』とイヌが言いました』。ありがとうございます。



二つ目。「枝に掛けておいたのに、ないのです」。
三つ目。「確かに、イヌが昨日寝る前にありました」。
こんな感じでね。じゃあこの三つは何だったでしょうか。
では、答えを言いますよ。一つ目は「あらあら」。二つ目は「枝」。
三つ目は「確かに」。これが正解ですね。だから、「あらあら」「枝」
「確かに」、これで覚えておられたら、すごく自信を持っていただ
いていいと思います。まあ、たぶん1個ぐらい飛ばれているんじゃない
ですかね。

これはですね、先生の話をしっかり聞いて、聞き逃さない。人
の話をしっかり聞くためのトレーニングなんですね。これは学校で
やっている例がムービーでありますので、少しご紹介いたします。

テレビ番組で取り上げられた中学校で実践されている「聞くト
レーニングの様子」を上映

(コグトレは) 個別でやる必要はないですね。先ほど、ご紹介
したように集団でやればいいです。朝の会の5分などを使って
いただいて、この課題(『覚える』最初とポン)をやれば、聴覚
のワーキングメモリーとか、注意力や集中力がかなり付きますの
で。この課題を朝やっている学校が結構あると聞いています。

これが大事なのは、ある中学校で中間テストの数学・国語の
成績とこの課題の成績をリンクさせたところ、すごい相関が得ら
れたんですね。この課題は、実はシートを使うと25点満点で成績
が付けられるんですけど。要は成績がいい子はこの課題がす
ごくよくできるし、やはり成績がよくない子はこの課題ができない
ということで。何かひとつ、1日5分、何かひとつするんだったら、
この課題をすることをお勧めしています。週に2回ぐらいやられて、
あとは数える課題とか、それでもずいぶん子どもたちが変わっ
てくると思います。



トレーニングの事例紹介②

〈課題〉覚える：「最後の単語」

これはいくつかある単語の中から、最後の単語だけ覚えるといっ
た課題です。

〈課題〉覚える：「何が一番？」

次が、『覚える』何が一番?という課題です。これは大きい・
小さい、重い・軽い、遠い・近いとか、いろいろな比較の入っ
た文章を読んで、何が何番目かというのを聞き取る課題ですね。
これも簡単なのを少し読んでみますので、せっかくですので、考
えてみてください。行きますね。

「キリンさんの家はゾウさんの家よりも大きいです。ライオンさ
んのはキリンさんの家よりも大きいです。一番小さい家に住ん
でいるのは誰ですか」。

頭の中で考えてみてください。いかがですかね。

答えは、ゾウです。一番小さいって言われてね、「あっ」って
いう感じになっちゃうんですけど。これはですね、聞き取りなが
ら次を聞き取るというところで、これも聴覚のワーキングメモリー
というところをフルに鍛えています。こういう課題を読み上げてい
くというものです。

〈課題〉数える：「記号さがし」～新しいブレーキをつける方法～

それから、次が「記号さがし」という、数える課題です。これは、
先ほどの三角形を数えるというのは、ただひたすら数えるんです
けれど、この課題は実はブレーキをかける練習なんです。

リンゴの数をできるだけ早く数えながら、リンゴにチェックをす
るんですけど、ただし、リンゴの左に雲・魚・音符の記号があっ
たらチェックしたら駄目だという課題なんです。

だから、たくさん並んでいる記号を、だっとチェックしてい
くんですけど、ここで魚があって、ここで「あっ」とブレーキを
かけられるかという。ブレーキをかけるトレーニングというのはな
かなかないんですよ、実は。ひたすらやるっていうのはあるん
ですけど。はっとしたんですけど、ルールが出てきて、それに対
してブレーキをかけながらというものがなかなかなくて。

どうしてこのトレーニングを考えたかといいますと、実は少年
院で、性犯罪をやっている子たちと、それ以外の子たちでどんな
違いがあるのか。面接をしても、何か違うんですよ。何か話
していても、何か違うなという感じがして。ひょっとしてこう
いうところで調べたら何か違うのが出てくるんじゃないかなと思
って。

いろいろ検査しましたら、処理速度が遅い。性犯罪の子たちは
処理速度が遅い。ワーキングメモリーが低い。それからブレー
キをかける力が弱い。この三つが共通して低かったんですね。窃
盗とかそれ以外の子たちに比べて、この三つだけ低かったん
ですよ。

ですので、これらのトレーニング。もちろん性犯罪の防止の
認知行動療法を使ったプログラムもする必要はあると思うん
ですけど、それだけじゃどうしても徹底的に治せない子たちも
いっぱいいましたので、やはり脳科学的なアプローチも必要だ
と思ひまして。

このシートはチェックした後のものですが、実はできるだけ
早くチェックするというので、スピードをアップさせます。そ
れから数えながらチェックというところと、この課題のルール
である、常に3つの記号のことも考えながらチェックするとい
うところで、ワーキングメモリーもトレーニングしています。
それからブレーキをかける練習ですね。この3つを同時に
トレーニングしていますね。それでこのトレーニングを作った
んですけども。

数年前に、人を殺してみたかったという事件があって、
実際に殺して大事件になったのが何件もありましたけれど、
ああいう事件があって本当に人を殺してしまったら、もう
大きなニュースになりますけれど、実は、その人を殺
したいと思っていて、実際に刺

してしまったけれど、幸いにして命の方は別条なかった、そういう事件は結構あるんですね。少年院でも、そういう子たちがそこそこいてまして。

ある子も、殺したいと思って刺して、幸い亡くならなくて。その子が何年か少年院にいたんですけども、出る前になって、「まだ殺したい気持ちが消えません」っていうふうに、ぼろっと言って。そのときに、もう何年もかけて、被害者の気持ちとか、いろいろな反省のことを教育してきているはずなんですけれど、やはり殺したいという気持ちは消えないんですね。

そういうときにどうしたかという、やはりこの課題（『数える』記号さがし）をひたすらやらせたり、要は、そういう気持ちは消えないというのを、消すように努力をもちろんしてほしいんですけど、それと同時に、もし刺そうと、殺したいと思ったときに、ブレーキをかけなさいということで、ひたすらこの課題をやらせました。ブレーキをかけるトレーニングってなかなかないですよ。

というところで、学校なんかでなかなかブレーキがかけられない子がいたら、この辺りの課題をだいたい週1回、7～8回ぐらいやったらかなりできるようになりますので、結構効果が出てくると思います。

〈課題〉 見つける：「さがし算」

あとですね。「さがし算」という課題です。これは、いま3+8は11、4+7は11って、一方向の計算ですけど、□の中にある数字をみて、たて、よこ、ななめのとなりあった2つの数字を足すと11になるものを探するという問題です。このように2つの数字を足すと11になるのが、丸で囲んだように3つありますとか。

〈課題〉 写す：「点つなぎ」

次の課題ですが、「点つなぎ」というものです。この課題をするだけでもかなり見る力が付いてきます。特徴的なのは、右にある2つの課題ですが、「くるくる星座」っていうものなんですけれど。上に描かれた星座を、下にある○の中の点をつないで、写すんですけど、描き写すと下の星座はくるっと回転するんですね。よく見てください。上の点の星の位置と下の点の星の位置が、違うん

です。これらの位置関係を頭の中で入れ替えながら写していかなきゃいけないという、結構難しい課題です。

それから、これは点をつないで、上のギターの絵を、下に写すものなんですけど、大阪市のある中学校で全生徒にやっていたんですけど、普通学級でやはり15%ぐらいが描けないんですね。受験を控えた子たちが、こんなものを描けない子がやはり15%ぐらいいたということが分かりました。次の2つのこんな簡単な絵も（下の□の点をつないで）やはり写せない子が通常学級にいるんだということです。

あと、この課題は、下の□の中にある10組の点を見つけて、立方体を見つける課題です。その横にある課題は同じ絵が（8枚のうち）2枚あるんですけど、それがどれかを見つけたり。その他にも、上にスタンプがあって、これを押したら、下のどれになるかを見つけるものもあります。それから、次の課題は「物語つくり」というもので、6枚のばらばらにある絵をストーリー順に並び替えるといった課題です。これは「順位決定戦」という課題です。イヌとウシが競争したらイヌの方が速かった。ウサギとイヌが競争したらウサギの方が速かった。これで1位、2位、3位の順位を考えるとですね。

〈課題〉 想像する：「心で回転」

それから折り紙を2回折って、どこかにパンチで穴を開けて、開いたらどれになるかを想像する。この辺は見えないものを想像するところの力を養っています。

これは最後の課題（『想像する』『心で回転』）ですけど、あなたから見たらこう見えるけれど、ウシさんから見たらどう見えるか。ウサギさんから見たらどう見えるかっていうところで、相手の立場に立って考えるというところ。相手の視点で考えるという練習ですね。

これはまだエビデンスはないんですけど、相手の気持ちを考えるときに、やはり相手の立場になって、さまざまな相手から見たらどう見えるのか、どう感じるのかというところに、ひょっとしたらこれは使えるんじゃないかなと思っています。

認知機能トレーニングの効果は

ここからは効果検証なんですけれど、30人弱で、トレーニングをした子としなかった子で効果を調べてみたんですけど、少し人数が減っているのは、途中で（少年院を）退院した子などがいて、それぞれ20人前後になるんですけど。

トレーニングした子とトレーニングしなかった子。実線がトレーニングした子です。これはIQ相当のDN-CASという検査なんですけれど、60弱ぐらいだった子が、トレーニングをした子だけで

20ぐらい伸びていて、その効果が3カ月たっても持続していたということなんです。トレーニングしていない子は、60弱のままだったということですね。このようにトレーニングした子はすごい変化が得られています。

これは「face discrimination」といった、表情認知なんです。28種類の表情を見せて、怒っているとか、笑っているとか、どんな表情か、気持ちを当てていく、そういうテストなんですけれど、



トレーニングを受けた子が有意に表情が読めるようになっている。これは明らかに社会性の向上にもつながっているんじゃないかなと思っています。相手の表情が読めるということ自体が社会性の一つですので、そういうところにもつながっていく可能性が十分あるかなと感じています。

次に立体図ですが、このような平面的な立体図しか描けなかった子が、立体図が描けるようになったり。Reyの図ですが、このようにすごくゆがんで描いていたんですけど、これが描けるようになったりするんですね。自画像。これも最初はこのように宇宙人のような絵だったんですけど、ここまでしっかり（人間を）描けるまでになっています。自分がもう全く別人に見えていますね。ここまで見たら、あんな難しい検査をしなくても、この絵を描かせただけで、（絵の）中身が変わったというのがよく実感していただけるかと思います。

この絵（人間の絵）を本人に見せたら、「本当にこれ、僕が描いたんですか」というふうな、本人自身もびっくりしていました。こんな宇宙人みたいだった絵が、こんなにキリッとした人間（の絵）になったという感じです。2つの絵を比べてください。全然違いますよね。こういうところにいろいろな変化が出てくるのかと思います。

それで、いままで一番伸びた子なんですけれども。（少年院に）入ったとき、IQが50前後ぐらいだった子がいたんですね。50前後ぐらいといったら、中程度の知的障害に近いので、もう疎通性（意思疎通）がかなり悪いんですよ。こちらが伝えても、何かぼかんとして、右か左に抜けていくような子で。この子はちょっと難しいなって思っていたんですね。施設で暴力を振るって少年院に来たんですけど。

でもその子が、たまたまコグトレで空きができて、少しその子をコグトレに入れたんですね。そうしたらコグトレの食いつきがすごくよくて、どんどん、どんどん課題をこなしてですね。それで4

カ月のトレーニングが終わった後には、なんとIQ相当の検査で90まで上がりましてね。50が90まで上がったんですよ。これで療育手帳が取れなくなったんです、実は。

これは果たして本人にとっていいことか悪いことか分からないんですけども。これはある意味、知的障害が治ったと言っているのか、これも分からないんですけども。これね、治ったって言ったら大問題、また大きな問題になりそうなので。でも、少なくとも療育手帳が取れなくなって、障害認定されなくなったんですね。IQ50の子がこんなに変わるのかということ、私も信じられなかったんですけど、やはり現実にこのようなことが何人か起きているんですね。

確かに非行の子たちというのは、もう虐待とかを受けていて、家庭環境がすごくよくないんで、環境要因というのがすごくあると思うんですね。ただ、もしIQ50のまま、この子ね、IQ50だからコグトレをやらせるのは大変、しんどいだけだなど、もしやらせなかったら、私はその子の障害をつくり出していたと思うんですよ。

われわれも本当に気を付けなきゃいけないと思うのは、この子にコグトレをやらせてもどうせ無理だろうなと思ってやらせなかったら、障害があって、どうせこれをやらせても本人が辛いだけだから、もっと苦手なところよりも得意なところをやらせた方がいいんじゃないかなと考え、苦手な子をやらせなかったら、われわれが障害をつくり出しているんじゃないかなと、すごく怖いものを感じましてね。だから本当にここは気を付けなきゃいけない。

ただ、ひたすら計算とか漢字ドリルをやらせるんじゃなくて、「点つなぎ」とかの課題をやらせ、本当に本人の認知の弱いところをいかに伸ばしてあげるかによって、本当に変わる可能性がありますので、これは私が大きく学んだことですね。

学校現場でのコグトレ実践例と効果

最後に、じゃあ学校ではどうしているかっていうところをご紹介して終わりたいと思います。学校現場でのコグトレの例ですね。

これはもう全国の学校で、いろいろところで（コグトレの課題を）いま使っていただいています。マスコミの取材もいろいろ来ています。



これはある山口の学校でやったものです。「最初とポン」（覚えるコグトレ）という課題の誤答数の推移を示すグラフです。この課題をクラス全体でやったんですね。個別じゃなくて。そうしたら、（気になる子どもたちの）誤答率の平均値が、コグトレの回数を追うごとにどんどん、どんどん下がり、間違いが少なくなっていったんです。

それから、これは「記号さがし」、正三角形を数えるという課題の誤答数の推移を示したグラフなんですけれども、実線が気になる子どもたち。おそらく境界域の子どもたちで、いろいろな先生方が、ちょっとこの子は気になると言われた子です。たぶん境界知能以下の子どもたちだと思います。この点線が通常クラスです。クラス全員から気になる子どもたちを引いた9人。これが全クラスの、気になる子以外のクラス全員の子どもたちの平均値なんですけれど。

クラス全体（クラス全員一気になる子どもたち9名）では誤答数ってそんなに変わらないんですね。10回やっても。ただ、気になる子どもたち9名を見ると、やはり最初は誤答数が多いんですよ。ただ、これを繰り返しおこなうと、だんだん、だんだん誤答数が減ってきて、最終的には同じになるんですね。これが一番コグトレの意義じゃないかなと思います。

要はこういう苦手なところを持っている子どもたちが、同じようにトレーニングをすることで、通常の子たちに追いつくということなんですね。ここがもう一番のコグトレの効果じゃないかなというふうに感じています。

これは大阪の小学校1年生を対象にトレーニング（「記号さがし」「形さがし」「順位決定戦」）をやったときのものなんですけれど、

第11回 矯正・保護ネットワーク講演会開催案内

主催：龍谷大学矯正・保護総合センター

参加費無料

要事前申込

先着150名様

※新型コロナウイルス感染予防のため今年度も参加人数を150名に限定させていただきます。

テーマ

生き直す ～薬物依存症からの回復～

2021年12月11日(土) 龍谷大学 響都ホール 校友会館
13:30～15:00(開場 12:30～)

きょうと
龍谷大学 響都ホール 校友会館
(京都市南区東九条西山王町31 アバンティ9階)
JR京都駅八条東口より徒歩約1分



■講演



たかち のぼる
高知 東生 氏(俳優)

>プロフィール

1964年高知県生まれ。
1993年に芸能界デビューし、映画やドラマ、バラエティに多数出演する。
2016年6月24日覚せい剤と大麻使用の容疑で逮捕。執行猶予判決を受ける。
2019年3月より依存症問題の啓発活動始める。
2020年5月Twitterドラマ「～ミセスロスト～インタベンションストアヤメ」で俳優復帰。
2020年9月自叙伝「生き直す～私は一人ではない～」刊行

■対談 高知 東生 氏×田中 紀子 氏(進行役兼ねる)



たなか のりこ
田中 紀子 氏(公益社団法人 ギャンブル依存症問題を考える会 代表)

>プロフィール

国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 薬物依存研究部 研究生。
祖父、父、夫がギャンブル依存症者という三代目ギャンブラーの妻であり自身もギャンブル依存症と買い物依存症から回復した経験を持つ。2018年12月にはローマ教皇が主催した「依存症問題の国際会議」に招聘され、「日本のギャンブル依存症問題」について講演した。
著書「三代目ギャン妻の物語」「ギャンブル依存症」「家族のためのギャンブル問題完全対応マニュアル」

参加お申込み

参加をご希望される方は、事前にお申込みが必要です。

インターネットから

- ①矯正・保護総合センターホームページ(<https://rcrc.ryukoku.ac.jp/>)の「講演会等のお申込み・資料請求」ボタンをクリックしてください。
- ②「お申し込みフォーム」の必要事項(名前・住所・メールアドレスなど)を入力し、内容確認後、送信ボタンをクリックしてください。
登録されたメールアドレスに受付完了メールを返信いたします。

FAXから

以下の参加申込書に必要事項をご記入の上、送信してください。

お問い合わせ

龍谷大学 矯正・保護総合センター

TEL:075-645-2040 FAX:075-645-2632

〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町67 至心館1階内

<https://rcrc.ryukoku.ac.jp/>

E-mail: kyosei-hogo@ad.ryukoku.ac.jp

2021年12月11日 第11回矯正・保護ネットワーク講演会参加申込書

フリガナ	当てはまるものに○をしてください。						
お名前	性別	男・女	年齢	10代	20代	30代	40代
				50代	60代	70代以上	
ご住所	〒						
電話番号	FAX番号						
メールアドレス	ご所属・ご職業 (差し支えなければ)						



075-645-2632

研究活動紹介

「矯正実務研究プロジェクト」の研究活動について

2010年4月、龍谷大学矯正・保護総合センターは発足しました。それは、1977年に開設された日本初の刑事政策に特化した教育プログラムである「矯正・保護課程」における教育活動と、2002年に文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業（AFC）として採択された「矯正・保護研究センター」における研究活動、さらに両者がそれまで担ってきた社会貢献活動を統合し、この分野での研究・教育・社会貢献を総合的に推進させる試みです。

矯正・保護総合センターでは、行刑や更生保護の実情についての理解を深めるためのネットワーク作りを重要な課題として位置づけています。それ故、矯正職員や元矯正職員、教諭、篤志面接委員、保護司のほか、薬物依存者の自助グループ、受刑者の就労支援など更生・保護支援のための、また、犯罪被害者支援を行う民間団体、さらに、刑事施設視察委員会、更生保護会、防犯協会、そして、報道機関等、矯正・保護に多様な角度から直接・間接に関与する方々の意見交換や研修を、研究者を交えて大学という場で実施する企画を積極的に進めています。矯正・保護の領域においては、これまで実務と研究との間には、いわば不幸な乖離がみられましたが、両者の間の従来の関係は、こうした作業を通じて大きく転換するはずで

というも、現場の実務家は、その職業意識が高ければ高いほど、時に現場の日々の苦境も知らずに実務の矛盾を論う研究者の批判を深く蔑んで、本来なされるべき対話を避ける傾向がみられます。政府等の政策審議の場では、名が知られていても専門の異なる研究者を重用し、形だけの会議をへて現状追認を基調とする実務の意向を追認させる例が珍しくありま

せん。他方で、研究者の方も、実務家が直面する現場の苦渋にまで思いを至らせずに、むしろ、批判を避けるために行政の無謬性だけを無造作に語る「嘘」に辟易として、実務への不信感だけを募らせる嫌いがあります。

総合センターの構想は、そうした悪循環を断ち、実務と研究の新しく、建設的な、そして、「先生」を集めた東京の会議とはまったく異なる、実務と研究の協力関係を作り上げるための格好の場を創造することを目的としています。矯正・保護の実情と課題にそれぞれに関心を持ちながらも、これまで立場を異にし、公には同じ席に着けなかった前述の様々な「現場」の人々を集め、この問題領域における真剣で、内容のある、だからこそ各々の職業意識と相互理解を深め、結果として「現場」に確実な影響を及ぼす議論の場を組織することこそ矯正・保護総合センターの使命と考えています。

「矯正実務研究プロジェクト」は、こうした試みの嚆矢といえます。このプロジェクトでは、年二回の定例会に刑務官、法務教官、保護観察官といった矯正・保護分野で働く龍谷大学卒業生の現職、OB・OGで構成する同窓会職域支部のメンバーを多数集め（残念ながら、この一年はコロナ禍のなかでこの会合を実施できませんでした）、それぞれの職場の実情と課題について、矯正・保護課程の講師やセンターの研究者を交えて、定期的に意見交換と研修の場を設けています。他では得られぬ相互理解を通じての有形・無形の成果がこのプロジェクトから生み出されています。

矯正実務研究プロジェクト代表
赤池 一将（龍谷大学法学部教授）

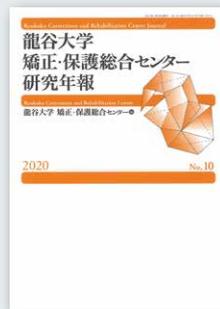
2021年度 矯正・保護総合センター研究プロジェクト



新刊情報

『龍谷大学矯正・保護 総合センター 研究年報 第10号 2020年』

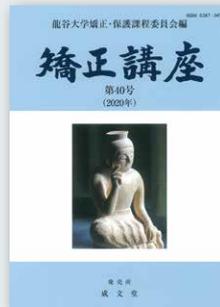
[編集発行者]
龍谷大学矯正・保護総合センター
[発行所]
株式会社現代人文社
[発行日]
2021年2月28日発行



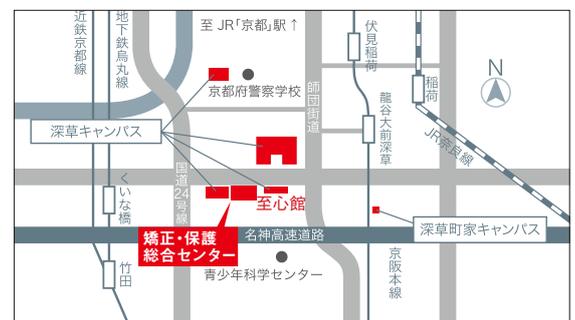
ISBN978-4-87798-774-9

『矯正講座 第40号 (2020年)』

[発行者]
龍谷大学矯正・保護課程委員会
[編集者]
矯正講座編集委員会
[発行所]
株式会社成文堂
[発行日]
2021年3月1日発行



ISBN978-4-7923-3406-2



龍谷大学 矯正・保護総合センター

- 京阪「龍谷大前深草駅」下車徒歩約8分
- JR奈良線「稲荷駅」下車徒歩約13分
- 京都市営地下鉄烏丸線「くいな橋駅」下車徒歩約5分

〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町67 至心館1階内
Tel.075-645-2040 Fax.075-645-2632
URL <https://rcrc.ryukoku.ac.jp/>
E-mail kyosei-hogo@ad.ryukoku.ac.jp